

朝日新聞デジタル > 記事

## 「死認めて」が奪う生きたい意欲 れいわ・舩後氏の懸念

会員記事

田中陽子、畑山敦子、森本美紀 2020年7月23日 19時00分

シェア

ツイート

ブックマーク

スクラップ

メール

印刷

[list](#)

22

全身の筋肉が衰える難病「筋萎縮性側索硬化症」(ALS)の女性患者=京都市=から依頼を受け、薬物を投与して殺害したとして、2人の医師が囑託殺人の容疑で京都府警に逮捕された事件。ALSの当事者や、生活を支える人たちはショックを受けつつ「どんなことがあっても障害者が生きることを否定してはいけない」と訴える。

### ALS患者「孤独感、孤立感に悩む」

《自身もALS患者で、NPO法人「境を越えて」理事長の岡部宏生さんの話》

とても残念な事件が起こってしまった。患者の背景はわからないが、このような依頼をしなければならなかったとしたら、非常に悔しく、悲しい。



岡部宏生さん

私は48歳でALSを発症し、死にたいと何度も真剣に思った。でも社会の支援を受けて、こうして生きている。生きてみようと思えたのは、明るく前向きに他の患者や家族の支援をしている先輩患者を見たからだ。あんなふうに生きたいと思うようになった。

ただ「生きたい」と「生きていける」とは違う。介護保険や障害者の生活支援サービスを十分に受けられ、介護者を確保できなければ、すべて家族に頼ることになる。経済的なことも含めて家族に負担をかけたくない、と生きることをあきらめる患者は多い。私

